

他者の態度への関心

—環境プラグマティズム以降の環境倫理学の方向性についての検討と評価—

神崎 宣次

一 間違った問題設定？

一九六〇年代に登場した環境倫理学⁽¹⁾は、環境破壊の原因が人類の自然に対する傲慢な態度にあるとみなして、環境危機を乗り越えるには非人間中心主義への価値観の根本的な転換が必要と主張する傾向にあった⁽²⁾。もちろん、非人間中心主義的傾向が主流を占めていたとはいえ、全ての環境倫理学者がそれを支持したわけではなかったので、結果として非人間中心主義対人間中心主義という二項対立が環境倫理学の基本的な構図となっていた。そしてこの論争は哲学的には主に内在的価値をめぐる議論として展開された。人間にとっての道具的価値に還元されない内在的価値を何らかの自然物が持つという主張が正当化されれば、この世界内で内在的価値を持つ唯一の存在と自認してきた人類は、その存在論的特権を放棄し、自らを生物共同体の「単なる一市民」「レオポルド、一九九七」と認識しなおすだろう。このような世界観の根本的な転換がなされないかぎり、環境危機が本質的に回避されることはない。これが主流派の環境倫理学が述べようとしてきたストーリーだった。この主張は、環境を含む世界をいかに認識し、経験するかという広義の認識論およびその背景をなす世界観に関わる主張である。既に述べたとおり環境倫理学者たちには、この主張が成功するには前提として内在的価値に関する哲学的議論が成功しなければならないと考える傾向があった。その意味で内在的価値

の問題は、環境倫理学において認識論や倫理に関する議論に先行すべき議論とみなされてきたといつてよいだろう。

不幸なことに、その後の環境倫理学の展開をみればあきらかだが、内在的価値という概念に説得力を与えようとする哲学的議論は十分には上手くいかなかった。⁽³⁾これは非人間中心主義の立場をとる論者であつても認めざるをえない事実だろう。

内在的価値概念に対して向けられてきた批判には、以下のようないくつかのタイプがある。(1)内在的価値という概念は論者によって異なつた意味で用いられているという多義性に対する批判、(2)この世界に存在する価値の評価者は人間のみである以上、全ての価値はその意味で「人間にとつての価値」であるという批判、(3)内在的価値の内容を實質的に定義しようとする試みは全て失敗しており、結局は「道具的価値でない価値」という否定形で定義せざるをえない、したがつてそれは空虚な概念であるという批判、(4)内在的価値に言及することによって示される自然物の価値は、その自然物が人間にもたらす利益によつても示すことができる。つまり内在的価値による価値の説明は道具的価値の説明に「翻訳」することができるので、内在的価値という概念は必要ではないという批判、(5)内在的価値への存在論的言及は形而上学を含むものであり、⁽⁴⁾主に科学や政策の言語に支配されている現実の環境政策の議論の場には不適切であるという批判。

しかしながら次節で説明するように、最近二十年ほどの議論で最も批判されてきたのは、内在的価値についての議論に決着がつかないかぎり環境問題が解決される見込みはないので、内在的価値についての議論が他のあらゆる議論よりも優先されなければならないという、優環境倫理学の主流派がとつていた(とされる)姿勢であつた。⁽⁵⁾注意してもらいたい、この批判によつて内在的価値の存在可能性そのものが決定的に反駁されたわけでもなければ(そのようなことが可能だろうか?)、自然そのものが持つ価値(それを従来どおりの内在的価値として考えるかどうかは別の問題として)の認識論の可能性が否定されたわけでもない。これらについての議論は現実の環境問題の解決に役に立たないので、後

回してもよいと宣告されたにすぎない。近年強い批判にさらされてきたのは、あくまでも内在的価値についての哲学的議論の優先性の主張なのである。

この程度の譲歩であれば、内在的価値が存在すると主張する非人間中心主義者であっても絶対に受け入れ不可能というわけではないだろう（アンドリュー・ライト [Light 2002] が主張するように受け入れるべきかどうかは別問題としても）。実際、非人間中心主義的傾向を持つ環境思想家たちは、自然はそれ自身として価値を持つというアイデアを人びとが簡単に受け入れるだろうと必ずしも考えていたわけではなく、むしろそうした考えを今すぐに多くの人びとが受け入れることはないと考えてきたのである⁽⁶⁾。

ここに環境倫理を含む環境思想の一つの重要な特徴が関わってくる。誰も一人では環境を守ることはできない。この明白な事実のために、環境思想はそれがたとえ哲学的真理であったとしても、それだけでは十分な存在意義を持たないとみなされる。思想家が自分一人でその真理を保持していてもだめなのである。環境問題解決のためにはどうしても集合的な取り組みが必要となる⁽⁷⁾。そのため環境思想には、より多くの人びとを環境保護へと動機づけ、動かす力を持つことが要求される。実際にジョン・ミューアのような環境思想家にとっては、公衆に対するコミュニケーションが大きな課題だったのである〔ナッシュ、一九九九、二〇〇―二二〕。したがって現実の環境問題の解決への貢献が第一の目的であるならば、優先性は存在論的あるいは哲学的な真理に置かれてはならない。環境倫理学がこの目的の達成に成功しなかった（と批判されることになった）のは、このような「間違った」優先性に固執してきたからであった。

二 提案されている四つの転回

内在的価値概念への環境倫理学の固執に対する批判は80年代半ば頃から登場してきた〔Weston 1985〕。内在的価値が環境倫理学の基礎付けとなることがまず示されなければならないという信念のために、そして結局それを示すことにい

つまでも成功しなかったために、環境倫理学は現実の環境問題解決に貢献しそくなってきた。⁽⁸⁾したがって、内在的価値に一元論的に固執しない価値多元主義を採用することによってこの袋小路を抜けだして、環境倫理学は現実の環境問題解決の取り組みや環境政策の決定過程にも影響を与える公共的な実践性を獲得しなければならぬ。「吉永 二〇〇八、一二六―一二七、一五六―一五七」。これが環境プラグマティストと呼ばれる一群の論者たちの主張であった。⁽⁹⁾たとえば一九九六年に出版された環境プラグマティズムに関する論文集 [Light & Katz 1996a] のイントロダクションにおいて編者であるライトとエリック・カッツは環境倫理学の今後のあるべき姿について次のように述べている。

But the fruit of this philosophical enterprise must be directed towards the practical resolution of environmental problems - environmental ethics cannot remain mired in long running theoretic debate in an attempt to achieve philosophical certainty. In short, environmental ethics must develop for itself a methodology of *environmental pragmatism* - fueled by a recognition that theoretical debates are problematic for the development of environmental policy. [Light & Katz 1996b, 1-2]

環境プラグマティストたちはこのようにして、内在的価値などの抽象的概念や原理についての議論から、具体的な環境問題や、その解決のための政策形成に取り進む方向へと環境倫理の焦点が転回させられるべきだという「Pragmatic turn」⁽¹⁰⁾を宣言したのである。たとえば環境プラグマティズムを代表する人物の一人であるブライアン・ノートンは、ある著作の中で次のように述べている。

The Strategy of this book will be to think about environmentalism as a force in public policy first and to examine philosophical question in passing. [Norton 1991, 12]

このようなアプローチを彼は“policy-oriented”なアプローチと呼んでいるが、まさに環境倫理学における優先性を、内在的価値のような（解決の見込みのうすい）哲学的議論から、現実的な政策へと移し変えることが主張されているの

である。また、先ほど名前を挙げたライトとカッツもノートンと同様の見解を次のように述べている。

The pragmatist claims …… is towards finding workable solutions to environmental problems now. Pragmatists cannot tolerate theoretical delays to the contribution that philosophy may make to environmental questions. [Light & Katz 1999b, 4]

全ての環境プラグマティストとは言わないにしても、環境プラグマティストの多くが共有しているこうしたスタンスにおいては、問題解決の実践性が抽象的な倫理学理論の追究よりも優先されているのは明らかである。実際ノートンは自分の哲学を、既存の抽象的かつ普遍的な倫理学理論を現実の問題に応用するトップダウン式の応用哲学(倫理学) Applied Philosophy (Ethics) ではなくて、現実の個別的事例に取り組み中でそうした原理が確立されていくという、いわゆる“problem-oriented”プロブレム・オリエンテッドの実践哲学 Practical Philosophy であると主張している [Norton 1995, 126]。

こうした主張は環境プラグマティズムだけにみられるものではない。ロバート・フロードマンも以上のような環境プラグマティズムの基本的スタンスを共有している。しかしながら彼によれば、環境プラグマティストの議論はなお“general, theoretical, top-down accounts of environmental questions”を中心とする応用哲学を留めつつある。それでは環境倫理学に要求される転回として不十分であって、哲学は“a type of fieldwork or practise engaged with the world rather than only a matter of discourse, making its home in the laboratory and the board room as well as in the classroom and scholar’s study”であると、“an active, ongoing engagement with both scientists and policy makers actually involved in the decision making process”を意味する [Frodeman 2006, 8-9]。なぜなら、科学者や政策決定者が環境問題に必然的に含まれる哲学的性質に関心を向ける機会があったとしても、哲学者の側が抽象的な理論問題に焦点を置いているかぎり、これらの人びとと有効に協働できないからである。環境倫理学

に対して自分が要求するこのような変化をフロードマンは“policy turn”と呼んでいる。その内容は次のように規定される。

A policy turn in environmental philosophy means a shift from philosophers writing essays for other philosophers to philosophers doing interdisciplinary research and working on projects with public agencies, policy makers, and the private sector. [Frodeman 2006, 3]

この規定を見るかぎり“policy turn”の内幕が環境プラグマティスト、とりわけノートンやライトの主張とどれだけ違っているのかは必ずしも明らかではないように思われる。さらに、唯一明確な差異の主張となっているのは上で言及した環境プラグマティズムに対するフロードマンの評価であるが、それに対しては環境プラグマティストたちから不当な評価だという異論が出るだろう。環境プラグマティストたちは環境保護団体や公的機関との協働を実際に行ってきたのである。したがってこれら二つの立場の間には（フロードマンの主張に反して）実質的な違いはないかもしれない。そこで本論ではこれら二つの立場をまとめて“policy-oriented”な立場と呼ぶことにしよう。

環境倫理学が実践上の有効性を欠いていたという認識をこれら二つの立場と共有するが、異なった視点からこの問題に取り組みようとする立場も提案されている。それがキャロル・ブースが主張する“motivation(al) turn”である[Booth 2009]。ブースによれば、大多数の人びとが環境保全に賛同的な感情を表明するにもかかわらず、保全への集合的とりくみは前進していないという“the widespread rhetoric-behaviors gap”が存在している。しかしながらこのようなギャップが存在するという事実は、人びとが口先だけの嘘をついたり、あるいは環境問題に関して無力感を感じていたり、自分たちに行えることについて知識を持たないから何もしていない、ということを意味するわけではない。少なくとも先進国では、人びとは環境問題に関して知識を持っており、問題解決に貢献するたくさんの方法も存在するからである。ブースによれば、このギャップに関する“a primary diagnosis must be that people are insufficiently

motivated by their beliefs and sympathies to act.” [Booth 2009, 54] つまり問題は知識や関心ではなく動機づけの欠如にあるというのである。環境哲学者たちはこれまで動機の問題を無視してきたが [Booth 2009, 59]、いかに多くの人びとを保全の取り組みに参加するよう動機づけられるかが今後の環境倫理学の焦点とならなければならない。

具体的にはブース [Booth 2009, 55] は、環境倫理学にとっての三つの重要な動機に関する問いとして、次のようなものを挙げている。(1) *Ought people be morally motivated to conservation?* (2) *What actually motivates people to conserve nature?* (3) *How ought people be motivated to conserve nature?*

これらのうちの第一のものは、これまでも検討されてきた倫理学的問いである。しかしながら、(2)の経験的問いと、(3)の規範的かつ戦略的な問いにも、環境倫理学は関心を向けるべきなのである。また、これら二つの問いは関連したものである。というのも、ここで言う「経験的」は心理学の研究を意味しているが、動機づけの心理学についての実証的知見を得ることによって、いかに効率的に人びとを動機づけるべきかという戦略的問いにも見通しが立つからである [Booth 2009, 73]。

同様の見解は環境プログラマティストであるライトの戦略的人間中心主義 *strategic anthropocentrism* の議論にも見られる [Light 2002, 562]。その議論によれば、人間中心主義的なレトリックによる環境政策の正当化の方が非人間中心主義的な正当化よりも人びとを説得しやすいという経験的証拠があるので、より多くの人びとを説得するためのコミュニケーション上の戦略として、環境哲学者は公衆に対して環境保護を訴えかける際には人間中心主義的な説明を用いるべきとされる。なお、ライトはこの議論の基盤となる経験的証拠として、環境保護に賛成する動機についてのアンケート調査 [Minteer & Manning 1999] を挙げている。

一方、ブースが環境倫理学の隣接領域となるべき実証的、自然主義的な研究の例として挙げているのは、道徳心理学 (ステファン・ステイチチなどの研究)、ニューロエシックス (アディナ・ロスキーズの研究)、進化生物学に基づいたバ

イオフィリア仮説 (E・O・ウィルソン) などである。ここからもわかるとおり、“policy-oriented”な論者たちとは違い、ブースはこれらの研究から導かれる理論をベースにして議論を行おうとしている。こうした経験的研究への言及は最近の倫理学研究全般に見られる傾向でもあり、たとえばメタ倫理学における内在主義/外在主義の論争や、徳倫理学における徳や性格や態度などが、脳神経科学や社会心理学や進化論や人類学からの知見を取り入れるかたちで論じられるようになってきている。⁽¹¹⁾

ブースは徳倫理学については論文中で簡単に言及しているだけであるが、環境倫理学の領域でも徳倫理学への理論的関心が最近高まっており(環境倫理学における“Virtue Turn”)⁽¹²⁾、環境徳倫理学と呼ばれる領域の研究が登場してきている。[van Wensveen 2000, Sandler & Cafaro 2005, Lindemann 2008] 環境徳倫理学を一言で説明するならば、何らかの徳を行為者が備えることによってブースの言う動機づけに関する「ギャップ」が生じなくなると考える立場と現もよいだろう。⁽¹²⁾ ただし環境徳倫理学にもさまざまなタイプの議論があり、必ずしも倫理的基盤は共通していない。現在のところ、(1) アリストテレスなどの古代以来の徳についての議論に基づくもの、(2) ヒュームの徳倫理に基づくもの、(3) ミューアやレオポルドやカーソンなどの現代の環境主義者の著作に環境に関わる徳を見いだすもの、(4) 環境教育の観点からの議論、などといった多様な議論が展開されている。ただし、ブースと同様に何らかの理論に依拠して議論を行うことを忌避しないという点で、総称として環境徳倫理学と呼ばれるこれらの諸議論の間に緩やかな共通性が存在するのは確かである。

ところで最近の環境徳倫理学の登場以前にも、ブースも述べているように [Booth 2009, 60]、自然に対する動機や感情や態度を重要視する環境倫理学者たちが全くいなかったわけではない。その重要な例としてヴァル・ブラムウッドなどのエコフェミニニストを挙げることができるだろう。したがって、ブースの“motivation(al) turn”が全く新しい方向性への転換という意味での転回といえるかについては、疑問が投げかけられてしかるべきだろう。本論で検討してきた

(環境徳倫理学以外の) 三つの立場は、内在的価値および非人間中心主義の哲学的正当化に焦点を置いていた主流派の環境倫理学からの転回を明確に主張しているが、それらの立場が批判対象としている主流派の環境倫理学が環境倫理学の全てだったわけではないのである。さらにいえば、環境倫理学自体が、そもその出発点においてはレイチェル・カーソンやリン・ホワイトJr.の議論の強い影響の下で出発したのであり、そうした出発点においては動機や態度や世界観の問題こそが環境倫理学の焦点だったといえる。環境倫理学の発展にもなつて、内在的価値概念を哲学的に論証する試みが環境倫理学内での哲学的議論の中心を占めるようになっていったとはいえず、本来内在的価値の議論はより根本的な問題を論じるための哲学的手段の一つにすぎなかったはずである。したがって、主流派の環境倫理学者は手段と目的を取り違えてきたという批判は正当であるかもしれないが、環境倫理学が動機や感情や態度の問題を全く検討してこなかったとはいえない。

主張内容の新しいさに関する同様の疑問は、戦略的問いの方にも向けられる。いかにして多くの人びとを動機づけ、環境保護に向けての集合的努力を達成するかという戦略性への関心は、ブースだけでなくフロードマンや環境プラグマティストにも共有されている。彼らは主流派の環境倫理学にはこのような実践的関心が欠けていたという認識に基づいて、それぞれの転回の必要性を述べたのである。たしかに、内在的価値こそが重要性を持つ唯一の自然の価値だとノックアウト式の哲学的議論で示そうとしていた環境倫理学のかつての基本方針は、現実の人びとが持つ多様な価値観や態度や動機を無視し、唯一の正しい価値を押し付けようとする一元論的傾向へとつながっていたかもしれない。そして、それがゆえに環境倫理学は人びとを現実に動機づけることができなかつたかもしれない [Norton 1991]。しかしながら、一九六〇年代から七〇年代にかけて登場してきた環境倫理学をその一部として含む広義の環境思想全体を見渡してみれば、そうした関心を持った環境思想家がいたことを確認できる。歴史学者ロデリック・ナッシュは、人びとに環境保護を訴えかけるために後年のミューアが戦略的人間中心主義的なコミュニケーション戦略を採用していたと指摘している [ナ

ツシユ、一九九九、二〇〇一—二〇〇二」。繰り返しになるが、環境問題の解決は一人では達成できないものであり、集合的努力を必要とする。そのため、環境思想家たちはいかに人びとをそうした努力に向わせるかに以前から重大な関心を持つてきたのである。その意味では、環境プラグマティストが批判したように、八〇年代頃までの主流派の環境倫理学が本当にそのような実践的関心を欠いていたとするならば、少なくともミューア以降のこの百年間ぐらいの環境思想という観点から見ると、主流派の環境倫理学はむしろ例外的な思想だったということになるかもしれない。もつとも、こうした見方が正しいのかどうかを明らかにするには、環境倫理学そのものについての歴史的観点に基づいた研究が今後なされる必要があるだろう。いずれにしても、他者の価値観や態度へのこうした関心が、現在の環境倫理学者たちの議論においても表明されているのは確かである。

三 環境倫理学における他者の態度とコミュニケーションの問題

前節の最後で論じたように、環境徳倫理学を含めた四つの提案されている転回は全く新しい方向性を示しているとは言えないだろうが、だからといってこれらの試みを持つ意義が損われるわけではない。少なくとも、これらの提案が環境倫理学の進むべきいくつかの方向性を共通して指し示していることは重要だろう。第一に、保全生物学等の自然科学や社会心理学や行動経済学などの領域で獲得された知見を一方的に取り込むだけでなく、それらの分野との間で学際的な研究を積極的に行っていくべきだという展望が共通して示されている。既に述べたとおり、これは環境倫理だけに該当する方向性ではなく、倫理学全般における現在の研究動向や、応用哲学や実験哲学といった領域の発展という哲学の現状とも合致した主張となっている。第二に、これも既に述べたことだが、現実の他者の価値観や態度に関心を向けるという共通点も指摘できるだろう。他者の態度に関心を持つということは、必然的に環境倫理学にコミュニケーション的問題の観点を持ち込むことになる。その場合、内在的価値の議論が一元論的傾向を持ったのとは対照的に、互いに均

質ではない現実の他者とのコミュニケーションの場面を想定する以上、環境倫理学は多元的な価値観を前提にしていかなければならなくなるだろう。

ではどのような種類のコミュニケーションを現在の環境哲学者たちは考えているのだろうか。他者の態度を一定の方向へ向わせようとするコミュニケーションの代表例としては、まず教育が考えられる。環境問題に関しても、環境教育が重要と考えられるようになってきているのは周知のことだろう。ここで一つ指摘しておきたいのは、環境教育の分野でもブースと同様に、単に環境についての知識を与えるだけでは不十分だと主張する著者がいるという点である〔今村、二〇〇九・Ort 2004〕。またレオポルドも「土地倫理」の中で、教育の量を増やすだけでは自然保護は進展しないと述べていた〔レオポルド、一九九七〕。したがって、知識だけでは環境保護への動機づけには必ずしもつながらないことは、環境主義者の間では広く共有されてきた問題関心といつてよいだろう。

教育タイプのコミュニケーションの重要な特徴は、当事者同士が対等な関係にはないという点にある。教育においては通常、知識や道徳的信念や適切な態度を備えているのは教師あるいは専門家の中で、教わる側は少なくともいづれかを十分には持たないと想定される。ブースにしたがえば先進国の人びとは知識は十分に備えているので、彼らは知識ではなく、環境に対する適切な態度や価値観についての教育を受ける必要があるということになる。だが、自然に対する価値観や態度についての真理を知っているとされる者（環境倫理学者？）が持たない者（公衆）に何らかの「教育」を行うとすれば、そのようなコミュニケーションには強制やエリート主義の要素が含まれてしまうのではないかという倫理上の疑念が当然出てくるだろう。このようなコミュニケーションは真の意味で公共的な議論とはなりえないかもしれない〔小林、二〇〇四・神崎、二〇〇八、三一―三四〕。

他者がある方向へと動機づけるコミュニケーションとしては、教育の他に説得がある。説得は教育ほどエリート主義や強制の要素を含まないと考えられるかもしれない。だが、人びとを一定の「望ましい」方向へと効果的に動機づける

ための「戦略」や、“skilled manipulation” [Booth 2009, 70] が議論されている以上、説得のかたちを取っていてもこうした恐れがなくなるわけではない。たとえば、価値の多元主義に基づいて民主主義的決定を重視するという環境ブラグマティストの基本的主張の一つと、ライトの戦略的人間中心主義の考え方との間には決定的な矛盾はなくとも、何らかの緊張がやはり存在するのではないだろうか。

また戦略的人間中心主義に従うならば、個人的信念としては非人間中心主義を採用している環境主義者であっても、公衆に向けて環境保護を訴えかける際には（自分自身の信念に反していても）人びとを説得するために人間中心主義的な表現で説明をすべきとされる。しかしながら、自分の信じていないことを信じているかのようなふりをして、それが倫理的な義務であるかのように人びとに語ろうとするのは、倫理的に不純な行いではないだろうか。⁽¹³⁾ たとえ環境保護を前進させることがいかに重要だとしても、レオポルド「一九九七、三二七―三二九」の言う、倫理の「代用品」を他人につかませようと試みる実践は、断じて倫理学ではありえない。

四 倫理学としての環境倫理学に向けて

では、どの立場が倫理学としての環境倫理学の方向性としてより望ましいと考えられるだろうか。ここでは、コミュニケーションの対象としてどのような他者が想定されているかという観点から、これらの現在の環境倫理学の潮流を二つのグループに分類した上で検討してみよう。まず、環境ブラグマティスト（の少なくとも一部）やフロードマンのような“policy-oriented”な論者が主要なコミュニケーションの対象として関心を持っているのは、環境政策に影響力を持っている政策決定者や科学者や環境団体のメンバーなどの専門家である。たとえばノートン [1991] は環境主義者間に生じているコミュニケーション不全を第一の問題とみなしていたし、ライト [2002] やフロードマン [2006] がそれぞれ
 ぞれの転回が必要と考えたのは、環境政策決定に携わる専門家集団の中で哲学者が彼らの同僚としての専門家という

ジョンを得るに至っておらず、彼らとの間に専門家としてのコミュニケーションを持っていないがために、環境政策の決定過程に貢献できないという問題意識があったからである⁽¹⁴⁾。つまり彼らが必要としていたのは、哲学者が環境問題の専門家として役に立てるといふ身分証明なのである。たとえばフロードマンは次のように述べている。

…… by helping to expose tacit presumptions and legitimating conversations about values within the policy sphere, a policy turn increases the possibility that our philosophic labors will bear fruit. [Frodeman 2006, 20]
(強調は神崎による)

環境政策への貢献を第一の目的とするなら、公衆の態度に関心を持つよりも、政策決定過程に影響力を持っている人びとや環境科学の研究者といった専門家たち、そして特定の問題に直接の関わりを持っている人びとに影響を与える方が、効果的だという意味で正しい戦略といえるだろう。だが、“policy-oriented”な立場の論者たちが個別の具体的問題を重視して、普遍的な倫理学理論の重要性を否定しないまでも二次的なものとみなす傾向を持つのは、彼らが主要な関心の対象としているのが一部の具体的な他者であるために、他者一般を扱う普遍的かつ抽象的な理論を必要と考えないからではないかという疑いが出てくる。

それに対して、ブースや環境徳倫理学者は人間一般の価値観や態度について理論に基づいて論じようとしている。“policy-oriented”な論者たちが倫理学理論にせいぜい二次的な価値しか与えないのに対して、ブースたちは倫理学理論に価値を認めているし、環境倫理学における内在的価値概念にも価値を認めうるだろう⁽¹⁵⁾。そして人間の態度や価値観についての普遍的な理論(必ずしも倫理学理論に限定されないとしても)に訴えかける以上、他者全般が関心の対象に含まれるだけでなく、自分自身の価値観や態度への関心も重要な倫理学上の問題として取り扱うことができる。これは倫理学としての大きな利点といえるだろう [Cataro 2005, 139]。

ならに環境徳倫理学者たちは、“policy-oriented”な論者たちとは違い、有効な政策や行動が結果として実行される

ことだけを環境倫理学の目的とはみなさない。なぜなら、徳倫理学の観点からはわれわれが何を行うかだけでなく、それがわれわれの価値観や態度とどのように関連しているかも重要とみなされるからである。¹⁶⁾ ブースも同様にわれわれの動機を問題にしているが、環境徳倫理学者たちと比較して、心理学等の実証的科学与との親近性がより高いという点と、環境倫理学の政策的実践性をより強調する点で異なっている。この二点ではブースはむしろ“policy-oriented”な論者たちに近いとも言えるだろう。

本論での私の主張をまとめよう。“policy-oriented”な論者たちは他者の価値観や態度には重大な関心を持っている一方で、自分自身の態度に関しては関心を示していないように見える。倫理学の観点からはその点が問題にされなければならぬだろう。彼ら自身の価値観や態度は最初から議論の対象に含まれていなく、その意味で特権化されてしまっている可能性がある。ライトのように価値多元主義を採用していると口では主張していても、結局のところ環境保護に向けて教育されたり説得されたりすると想定されているのは他者なのではないか。“policy-oriented”な議論では、実践的な問題解決の場において、倫理学者は常に説得する側に立つと想定されるか、あるいはコミュニケーションの調停者として中立的な態度をとると想定されているのである[吉永、二〇〇八、一五七、Light 2002]。いずれの場合であっても、彼ら自身の態度や価値観が倫理的検討の対象となることはない。ここにも言葉と態度の間に、ブースが述べたのとは別種の倫理に関わるギャップが存在しているのではないだろうか。

もちろん、“policy-oriented”な論者たちが強調するとおり、環境問題の解決に向けての集合的取り組みという実践的問題が非常に重要なのは間違いない。かつて環境倫理学者はその問題を「われわれは何をすべきか」という問いのカタチで論じた。場合によっては環境全体主義という批判も受けたが、少なくともその問いには倫理学者自身の態度への倫理的関心が含まれていた。それに対して、現在の“policy-oriented”な論者たちは(自分以外の)人びとをいかに動機づけるか」を主に論じるようになってきている。そして、それが環境倫理学者が公共に対して提供可能な貢献だと考え

られているのである。現在ではそうした貢献の必要性が「理論的な倫理学から実践的な公共哲学へ」といった標語で語られるが「吉永、二〇〇八」、そこに示されている方向性では、いくつかの倫理学的に重要な問いの延期あるいは忘却との引換えによってのみ実践性の獲得が可能であるかのように考えられてしまふ恐れがある〔Lucas 2002, Eckersley 2002〕。だが幸運なことに、そのような二者択一は環境倫理学にとって必然的ではなからず。本論で論じたように、理論と実践の両方を視野に入れる方向性が現在の環境倫理学には既に登場してきているのである。

参考文献

- Booth, C. (2009), 'A Motivational Turn for Environmental Ethics' in *Ethics & Environment* Vol. 14 NO. 1, 53-78.
- Cafaro, P. (2001) 'Thoreau, Leopold, and Carson: Toward an Environmental Virtue Ethics' in Sandler and Cafaro 2005, 31-44.
- Cafaro, P. (2005) 'Gluttony, Arrogance, Greed, and Apathy: An Exploration of Environmental Vice' in Sandler and Cafaro 2005, 135-158.
- Eckersley, R. (2002), 'Environmental Pragmatism, Ecocentrism, and Deliberative Democracy: Between Problem-Solving and Fundamental Critique' in B. A. Minteer and B. P. Taylor (eds.) *Democracy and the claims of Nature: Critical Perspectives for A New Century*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, 49-69.
- Frodeman, R. (2006), 'The Policy Turn in Environmental Philosophy' in *Environmental Ethics* Vol. 28 Spring, 3-20.
- Katz, E. (1987), 'Searching for Intrinsic Value' reprinted in Light and Katz 1996a, 307-318.
- Light, A. (2002), 'Taking Environmental Ethics Public' in D. Schmitz and E. Willott (eds.) *Environmental Ethics: What Really Matters, What Really Works*, New York: Oxford University Press, 556-566.
- Light, A. and Katz, E. eds. (1996a), *Environmental Pragmatism*, London, UK: Routledge.
- Light, A. and Katz, E. (1996b), 'Introduction' in Light and Katz 1996a, 1-8.
- Lindemann, M. A. (2008), *Environmental Virtue Education: Ancient Wisdom Applied*, Saarbrücken, Saarbrücken: VDM.

- Lucas, P. (2002), 'Environmental Ethics: Between Inconsequential Philosophy and Unphilosophical Consequentialism,' in *Environmental Ethics* Vol. 24 Winter, 353-369.
- Minteer, B. A. and Manning R. E. (1999), 'Pragmatism in Environmental Ethics: Democracy, Pluralism, and Management of Nature' in *Environmental Ethics* Vol. 21, 191-207.
- Norton, B. G. (1991), *Toward Unity Among Environmentalists*, New York: Oxford University Press.
- Norton, B. G. (1995), 'Applied Philosophy vs. Practical Philosophy: Toward an Environmental Policy Integrated According to Scale' in D. E. Marietta Jr. and L. Embree (eds.), *Environmental Philosophy & Environmental Activism*, Maryland: Rowman & Little Field Publishers, 125-147.
- Orr, D. W. (2004), *Earth in Mind: On Education, Environment, and the Human Prospect*, 10th Anniversary Edition, Washington: Island Press.
- Sandler, R. and Cafaro, P. eds. (2005), *Environmental Virtue Ethics*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.
- Sinnott-Armstrong, W. ed. (2008), *Moral Psychology* Volume 1-3, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Stone, C. D. (1972) 'Should Trees Have Standing? - Toward Legal Rights for Natural Objects,' in *Southern California Law Review* 45, 450-457.
- van Wensveen, L. (2000), *Dirty Virtues: The Emergence of Ecological Virtue Ethics*, New York: Humanity Books.
- Weston, A. (1985), 'Beyond Intrinsic Value: Pragmatism in Environmental Ethics' reprinted in Light and Katz 1996a, 285-306.
- 今村光章 (二〇〇九)『環境教育と共生社会』『環境倫理における「専門家」と「役に立つこと」』『哲学論集』五四集 大谷大学哲学会、二二—三九。
- 神崎宣次 (二〇〇八)『環境倫理における「専門家」と「役に立つこと」』『哲学論集』五四集 大谷大学哲学会、二二—三九。
- 神崎宣次 (二〇〇九a)『ブライアン・ノートンの収束仮説および関連する思想の批判的検討—環境倫理学における実践上の有効性』『価値・動機と倫理問題—』『倫理学研究』三九号、関西倫理学会、一四六—一五六。
- 神崎宣次 (二〇〇九b)『価値多元主義の下での非人間中心主義の擁護』『倫理学年報』五八集、日本倫理学会、五一—五四。
- 小林傳司 (二〇〇四)『誰が科学技術について考えるのか コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会。
- レオポルド、アルド (一九九七)『野生のうたが聞こえる』新島義昭訳、講談社。(Leopold, Aldo (1949), *A Sand County Almanac*)

naac, New York: Oxford University Press.)

ナッシュ、ロベリック (一九九七)『自然の権利』松野弘訳、筑摩書房。(Nash, Roderic F. (1990), *The Rights of Nature - A History of Environmental Ethics*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.)

ネス、アルネ (一九九七)『ネイーン・エコロジーとは何かーエコロジー・共同体・ライフスタイル』斎藤直輔・開龍美訳、文化書房博文社。(Naess, Arne and Rothenberg, David (1989), *Ecology, Community and Lifestyle*, Cambridge: Cambridge University Press.)

吉永明弘 (二〇〇八)『「環境倫理学」から「環境保全の公共哲学」へーアンドリュー・ライトの諸論を導きの糸にー』『公共研究』第五巻第二号、千葉大学公共研究センター、一一八一―一五七。

注

- (1) 本論で環境倫理学という場合、一九六〇年代から七〇年代にかけて登場してきたアカデミックな哲学研究の一領域を指している。それに対して、環境倫理学を含めた環境に関連する思想全般を指す場合には環境思想という語を用いることにする。また環境主義者という語は、環境問題に何らかの関心を持ち、それぞれのやり方で環境問題に関わろうとしてきた人物という非常に広い意味で用いている。そこには環境倫理学者の他「保全生物学者」環境団体メンバー、環境行政に関わっている人物、などが含まれる。
- (2) “Mainstream environmental ethics has developed under a narrow predisposition that only a small set of approaches in the field is worthwhile …… Although a wide variety of positions is discussed in the literature, the consensus it seems, is that an adequate and workable environmental ethics must embrace non-anthropocentrism, holism, moral monism, and, perhaps, a commitment to one form of intrinsic value.” [Light & Katz 1996b, 2]
- (3) しかしながら、たとえばアルネ・ネスのディープエコロジーなどは、人びとの環境に対する態度に一定の影響を与えたという意味においては十分に成功していると評価されるべきだろう。また環境哲学や倫理学の成功と失敗という論点に関しては、ある概念や思想の意味が明晰に分析されるかどうかはその思想が人びとを環境保護に向けて動かせるかどうかとは関係がないというネスの主張と、本論に登場するノートンやライトによる内在的価値概念に対する環境プラクティズムの観点からの批判を対比させて検討してみる必要もあるだろう。ネスのこの主張については、デヴィッド・ローゼンバーグによるネスの著作への序文を参照のこと。

と「ネス、一九九七、一四一―一五」。

(4) この論点に関連しては、ニライマン・ノートンの次の主張も参照せよ。“The difference between intrinsic value and inherent value is epistemological, not moral. Intrinsic value, being prior to human conceptualization, is therefore *discovered*, …… This presents a crucial distinction, epistemologically, because intrinsic value, unlike inherent value, cannot be supported by scientific or any other cultural resources --- it must be supported independent of all experience. It must be “intuitively” true.” [Norton 1991, 235]

(5) “Most environmental ethicists have, to date, assumed that we must, to escape arrogance, posit value as independent of human valuing or human valuer. This value has proven to offer little guidance in action and has raised innumerable and intractable questions in the metaphysics of morals.” [Norton 1991, 252]

(6) たとえば、レオポルド【一九九七】やクリストノー・ストーン【1972】は人びとの価値観や社会の大きな転換が生じる「兆候」について語っていたのであり、彼らは自らの環境思想を「確かなところまでやってきているが、今のところはまだ生じていない」変化をみなしていったのである。

(7) “fundamental changes will not be achieved by individuals acting voluntarily, but by collective activism achieving political reforms that compel or facilitate responsible lifestyles.” [Booth 2009, 69]

(8) 現在では、環境倫理学の哲学的基礎付けというほど大きな役割を内在的価値に負わさないようにすることによって、その概念の意義を擁護する議論もなされている [Katz 1987, 316; 神崎、二〇〇九a、五1]。

(9) ただし、本文で述べた以外の点については、環境ブラクマティズムとみなされる論者の間でも主張の内容にかなりの幅がある。この点については、環境ブラクマティズムについての論文集の編者たちによる序文を参照のこと [Light & Katz 1996b, 5]。

(10) Minteer & Manning 1999, 192.

(11) こうした傾向を概観する論文集としては [Simnott-Armstrong 2008] が有名。

(12) ブースと同じキャプションの問題への環境徳倫理学の観点からの言及については [Cafaro 2005, 151] を参照のこと。

(13) 環境ブラクマティズムに対する不純さという観点からの批判については、次の論文を参照のこと。神崎、二〇〇九a、一五―一五三。

- (14) なおブリスもこのような関心を共有している [Booth 2009, 54-55]。
- (15) “Environmental Philosophy can itself constitute motivational capacities …… The idea that nature has intrinsic value has wide appeal, and provides one way of justifying a conservation ethic, a cognitive motivational capacity.” [Booth 2009, 64]
- (16) “Our environmental decisions make us better or worse people and create better or worse societies …… Any complete valuation of our actions and lives must include a virtue ethics component, and any complete environmental ethics must include an environmental virtue ethics.” [Cafaro 2005, 31]

(付記) 本稿は平成二二―二四年度科学研究費補助金(若手研究(B))「ポスト・環境プラグマティズムの時代における自然の価値の認識論の可能性」(課題番号:2272006)の成果の一部である。

(筆者) かんざき・のぶつぐ 京都大学助教文学研究科/倫理学)

Concerns for attitudes of others

by

Nobutsugu KANZAKI

Assistant Professor

Kyoto University

Main stream environmental ethics has been criticized for its adherence to the concept of intrinsic value of nature and its failure to contribute to actual environmental problem solvings. For example, in 1980's Environmental pragmatists insisted that environmental ethics should reform itself to be more practical. They called the reformation "pragmatic turn." But it is not the only turn proposed by environmental philosophers to environmental ethics. In this paper, I examine four turns: pragmatic turn, policy turn (Robert Frodeman), motivation(al) turn (Carol Booth), environmental virtue ethics. All of these share interests for 1) practicality or activity of environmental ethics and 2) communications between environmental philosophers and others. These two are intertwined problems. Since no one can solve environmental problems by one self and collective efforts are needed, environmental ethics must include considerations about communication. Environmental philosophers seems to suppose two types of others: public and other professionals (conservationists, biologists ...). "Policy-oriented" philosophers such as some pragmatists and Frodeman think their main targets of communication are professionals and have serious concerns for attitudes of them. In contrast, Booth and environmental virtue ethicists have concerns for attitudes of human including others and themselves. So concerns for attitudes of others are the shared feature of the four directions of environmental ethics, but two of these lack concerns for attitudes of environmental philosophers themselves. In conclusion, I insist that concerns for attitude of oneself is an essential part of ethics and for this reason the latter two are preferred as future directions of environmental ethics as ethics.
